

YAGP Japan



東京でのグラン・デフィレ Photo: Hideaki Tanioka

今月号の日本語ページは、昨年12月に行われたユース・アメリカ・グランプリ(YAGP)の日本予選(準決選)とガラの様子について、英語記事に加筆してお伝えします。

2010年春にニューヨークで決選の行われるユース・アメリカ・グランプリ2010日本予選は、2009年12月17～20日に兵庫県尼崎市のアルカイク・ホールで開催されました。またYAGPは今年度で設立10周年を迎えるため、併せて記念ガラ公演が22日に東京の文京シビックホールで行われました。公演当日のリハーサル中に、YAGP創設者でディレクターでもあるリッサ・サヴァリエフに、尼崎の講評をうかがいました。

「今回は昨年を上回る数のスカラシップが出て、大成功でした。特に、プリコンペティティヴ部門にはすばらしい才能を持った楽しみな生徒が多かったです。9歳から11歳という年齢は、すぐに親元を離れて長期の留学をするには早すぎますが、本当に先の楽しみな人材が集まっていました。YAGPでは、“何回回ったかなんて関係ない、確かな基礎を築き、美しいラインと音楽性を身につけることが重要だ”と事あるごとに強調してきました。今回まで3年連続尼崎で日本予選を開催してきましたが、期間中に行われるワークショップを引率の先生方も熱心に見学してくださって、正しい指導が浸透してきたのを感じます。生徒のレベルは、毎年上がってきていますね。

そして、スクールではなくカンパニーからのオファーも2つありました。シニア男子第1位の宮川新大(みやがわ・あらた)への、ヒューストンとドレスデンからの誘いです。アラタは2004年に11歳でYAGPに出場し、その後シュツットガルトのジョン・クランコ・バレエ学校に留学。5年間学んで卒業を迎えましたが、16歳という年齢はバレエ団に就職するには若すぎたので、いったん日本に帰国しました。この後出場予定のローザンヌ国際バレエコンクールやYAGPのニューヨーク本選でも、さらにいくつかのオファーを受けることでしょう。」

実際、ガラ公演で『グラン・パ・クラシック』のヴァリエーションを披露した彼の踊りは、このコンクールの重視するラインの美しさ、音楽性の面で際立っていて、正統的で国



宮川新大
Photo: Hideaki Tanioka



左右木茉莉 Photo: Hideaki Tanioka



『海賊』アリーナ・コジョカルとセルゲイ・ポルーニン Photos: Hideaki Tanioka

際水準の品のよさを感じさせました。終盤のアントルシャの明晰な美しさもすでにプロの水準にあり、誇らしげなラリッサの言葉を十分に裏付けるものでした。年少の参加者の質の高さ(および向上)についても、プリコンペティティヴ部門第1位の左右木茉莉(そうき・まりん)のスワニルダのヴァリエーションを見れば納得がゆきま。よく伸びたつま先には定まった焦点と力があり、リズム感やまっすぐに通った軸、力みのない上体の美しさも印象的でした。

この二人は確かに傑出した存在でしたが、コンクール全体の成果として、百名を超える参加者たちが一堂に会した『グラン・デフィレ』の一体感、大きな流れを生み出す心地よいエネルギーにも、忘れがたいものがありました。ラリッサは「全員をニューヨークに連れて行きたいほど！」と悩ましがでしたし、作品を振り付けたカ

ルロス・ドス・サントス・ジュニア(アルヴィン・エイリー舞踊団)も、4日間の会期中にゼロからスタートし、心を合わせて踊りを仕上げた日本の生徒たちの勤勉さ、習得の速さに感無量の面持ち。「もっとストレートに感情を表現する手段を身につけてくれたら、さらに素晴らしいよ！」とのメッセージを残してくれました。

さて、ガラ公演には世界各国から多数のゲスト・ダンサーも出演し、華やかな盛り上がりを見せました。なかでもニューヨーク・シティ・バレエのアシュリー・ボーダーとゴンザロ・ガルシアの『チャイコフスキー・パ・ド・ドゥ』は、前へ前へと疾走していくようなリズム感、音楽と存分にかけ合う“遊び”の振幅の大きさが、バラシン作品の神髄を見せつけました。2002年のニューヨーク本選での銀賞受賞者でもある清水健太は、直前に来日不能になったダンサーが出たための急遽の出演でしたが、『ロミオとジュリエット』(振付:熊川哲也)のバルコニーのパ・ド・ドゥでめりはりの利いた大きな動きと美しいポーズを印象づけ、また相手役でKバレエカンパニーの同僚プリンシパルである康村和恵も、ほっそりとした全身から詩情をほとぼらせました。

ロイヤル・バレエの新進のスターのひとり、セルゲイ・ポルーニンもYAGPのグランプリ受賞者(2006年)。プログラムの最後を飾る『海賊』でのパ・ド・ドゥでは、音楽と役柄への没入も申し分なく、技量をさらに磨くだけでなく、主演者として順調に成長していることを伺わせました。そして、その彼がかすんでしまうほどの輝きを見せたのが、アリーナ・コジョカル。自在の音楽性、盤石のポーズ、舞台空間に広がっていくオーラの強さと、何をとってもまさに破格の印象でしたが、とりわけコーダで見せたゆっくりとしたイタリアン・フェットが鮮やか。回転の前半で大きく脚を振り上げた瞬間に生まれる夢のような浮遊の感覚と、一転して引き絞られたアチチュードで見せる凝縮と覚醒のコントラストがすばらしく、従来の彼女の魅力である可憐さだけではない、艶然とした余裕さえ感じさせたことでした。(長野由紀)